

将来から現在を見て変革



ISO14001

米沢日本電気株式会社

小笠原 慶

当社は、平成八年八月、山形県で最初に環境マネジメントシステムISO14001に挑戦し、認証を取得したが、審査を受けて意外の感を持った。環境負荷を少なくするのは当然であるが、法律・条例に準拠し、省資源・省エネルギーの観点から今出来ることを如何に忠実に実施するかを審査され、現状よりも少し改善された諸施策がまな板に乗るかと考えていたので、当初違和感を禁じ得なかった。とはいえ、従業員の環境向上意識が高まるとともに、環境保全活動がシステムで動くようになり、「環境に配慮した製品の設計」、「廃棄物の削減」、「省エネルギー」等の目標を次々とクリアすることができたことは大きな成果といえる。

この認証取得活動を通して、地球環境問題について考えさせられたことの一端を示したい。

子供の頃、時代は終戦直後の北海道の小都市で育ったが、当時は自然を征服する開拓の時代であり、人間が自然に立ち向かい、自然を

如何に利用するかに全精力をかたむけていた。奥地へ奥地へと人が入り荒れ野を開墾し、明日の食糧を必死に確保する時代であった。身の周りは自然界からとれるものに囲まれており、時間が経てば自然界に戻るものばかりであった(例外は瀬戸物ぐらいか)。川に生活排水を流すにしても、自然の力で修復可能な量であり、質であった。子供心にどこかひっかかる言葉として、誰から教えられたか定かでないが「五尺流れて水清まる」の言葉が残っている。

地球は有限と感じられるようになって何年経つのだろう。資源の寿命が論ぜられるようになって二十〜三十年ぐらいだろうか。一人ひとりの存在から見た時、地球は絶対的な大きさ、深さを持っており、無力な存在で何をしても許される時代が有史以来続いて来たが、ここ三十年の人類の進歩、発展は目覚ましく、まさしく異常と言える。

ご承知の通り世界人口は指数関数的に増加しており、二〇〇〇年には六十億人を超え、

二〇五〇年には百億人に達すると言われる。人類が誕生して四百万年になるが、今や三十年で二十億人増加するという異常なスピードで増殖している。

一方、日本においては、焼野原のゼロからの出発で経済大国と言われるところまで発展し、寿命は人生五十年が六十年となり、世界一の人生八十年といわれるまでになった。特に手段を用いずして出生率は一・四三と人口抑制が続いており、高齢化と少子化が一段と進むが、これはマスとして健全な姿であるうか。

我々は経済活動の中に組み込まれているが、基調として利便性の追求、個性尊重にあった多様性を顧客指向の名のもとに、生き残りをかけて取り組んでいる。結果として、家には物があふれ、生活廃棄物が年を追って増加している。我が家を例にとっても、これらの物は十年後、二十年後に確実にゴミ、粗大ゴミとして、子、孫から一瞥されなくなる代物である。多少の思い出しがらみがあるにせ

Value Sight 環境

将来から現在を見て変革



よ、今我々は粗大ゴミに囲まれて生活している。「物の豊さから心の豊さ」などと聞こえて来るが、衣食足りすぎた民族の多様化の一側面にしか見えないのはひびがみだるうか。我々は物質文明の基で生活し、経済活動をしているが、従来自然界からは容易に手に入らなかった物質によって、数々の恩恵にあずかっている。おおむね化学物質と言われる

もので、工業製品、医療品、食品に数多く登場して来た。開発された当初は今まで無かった画期的な物質で人類の発展に大きく寄与すると喧伝され、しかも無害であると言われた。或る物は何千年も変化しない、自然界にも悪影響がないといわれた。これらはどこから見ても良い物と判断せざるを得なかった。科学の勝利とまで言われた。産業に係る物質として、カドミウム、ポリカーボネート、トリクロロエチレン、フロン等々、その時代の産業・商品になくはならないものであったが、その後の悪影響は人類にツケとして今問題になっている。それは人間にのみ害をなすのではなく地球上に生息する生き物すべてに害をなし、連鎖の形でまた戻って来る。

何故、人類にとって良い物が悪くなるのか、その判断が後手に廻るのか？。素人が答えられる設問ではないが評価が万全でなく、実験室或いは試験において検出できなかった事、また時間が係数となり五年、十年経って初めてその影響がわかること、因果関係の見極めが難しい等々が考えられる。腐らない物、虫が寄りつかないもの、完璧なもの等人間にとって一次的に便利なものは疑ってかかる必要がある。不自然なものと思わす必要がある。さもなくば、人類は自然淘汰の過程を順調に進んでいることになる。

地球規模での環境問題は、つまるところ人間の量と価値観の質の問題である。一九七二年ローマに集まった世界賢人会議が「成長の限界」を提言し、その後の地球サミットでは「持続可能な開発」が採択された。持続可能な発展、開発は現在と将来の妥協の産物であ

り、現在に重きを置いているのはゆがめられない。これは改善であって改革ではない。地球温暖化防止京都会議では、温室効果ガスを先進国平均で五・二%、日本は六%削減という目標が決められた。果たしてこれで十分なのだろうか。

今必要なのは、現在から将来を見るのではなく、将来から現在を見る姿勢であり、百年三百年後のシミュレーションから今何をなすべきか知らしめることだと思う。その意味でグローバルな教育が必要である。個人或いは一企業が「地球にやさしく」や環境管理活動に参加すると言ったものではなく、一人ひとりの人生を律するレベルの変革が必要である。我々が過去のものとしている、宗教、哲学、倫理の出番が近いような気がする。



小笠原 慶

米沢日本電気株式会社取締役TQM推進部長。昭和15年北海道生まれ。米沢市下花沢2-6-80。昭和40年日本大学工学部卒業。同年米沢製作所（現米沢日本電気株）入社。昭和58年品質保証部長。平成元年TQC推進部長。平成5年より現職。